天武天皇
持統天皇　檜隈大内陵鳥居改築工事に伴う立会調査

天武天皇と持統天皇の合葬陵である檜隈大内陵は奈良県高市郡明日香村大字野口に所在する。当陵の墳形は八角形で、五段に築成されており、相対する辺間の距離は約 37 mとされる(1)。なお、当陵の遺跡としての名称は野口ノ大墓古墳である。

今回の調査は、当陵の拝所内に設けられた木製の鳥居が経年のため劣化したことから(2)、これを石製の鳥居に改築することに伴って実施したものである（第 32 図)。なお、調査期間は平成 28 年 1 月 22・23・25 日の３日間であった。調査にあたっては、既存の木製鳥居の基礎除去および新規の石製鳥居の基礎施工に伴う掘削時に立ち会うこととし、調査箇所の平面図および土層断面図作成や写真撮影をおこなった。

今回の工事に伴う掘削範囲は、既存の木製鳥居の基礎を除去し、新規の石製鳥居の基礎を施工するための余掘りを考慮して幅約 5.1 m×長さ約 2.5 m×深さ約 1.5 mとなった。掘削範囲の大半は既存の鳥居を設置した際の埋土であったが、トレンチ状となった掘削範囲の四壁周辺では地山が確認された（第 33 図、図版 30)。

上述したように、確認された土層はⅠ層：既存の鳥居や延石などを施工した際の埋土、Ⅱ層：地山、の大別二層であった。地山は明黄橙褐色で、花崗岩の表層が風化してもろくなった層である。当陵が立地する丘陵は、当陵の北側において東から西へと延びる尾根から南東方向へ突き出た丘陵であり、いわば独立丘陵状になっているが、この独立丘陵じたいが恐らく花崗岩の岩盤によって形成されているものと推測される。

なお、今回の掘削深度を考えると周濠のような築造時にかかわる墳丘周辺施設の検出されることも想定されたが、そのような遺構は確認できなかった。註（１）にあげた文献によれば、今回の調査地点は外周石敷から約 7.5 m離れており、仮に周濠のような施設があったとしてもその間におさまっているものと考えられる。

このように、今回の調査では遺構や遺物は確認されなかった。このことから工事は予定通り施工されることとなった。なお、明日香村教育委員会の西光慎治氏には調査中に検分いただき、ご指導賜った。末筆ながら記して謝意を表したい。

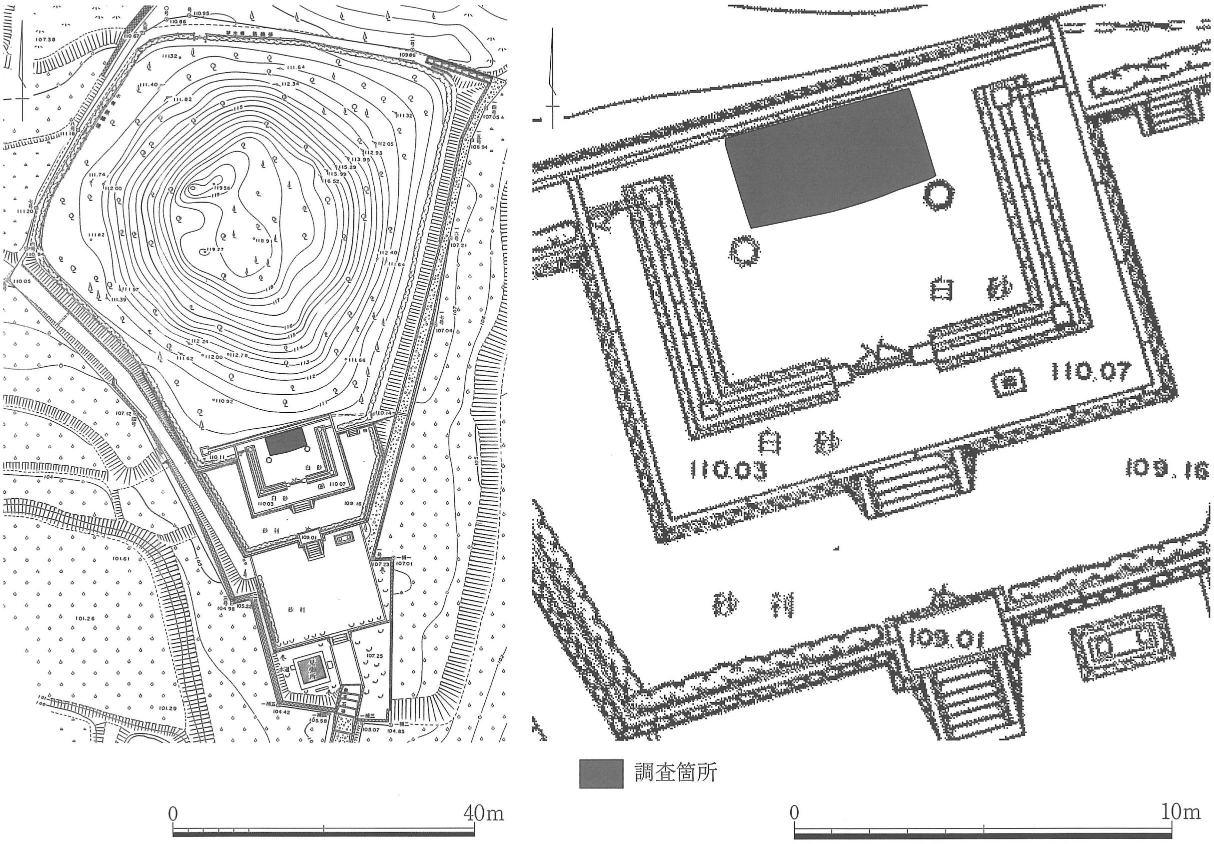
（加藤一郎）

註

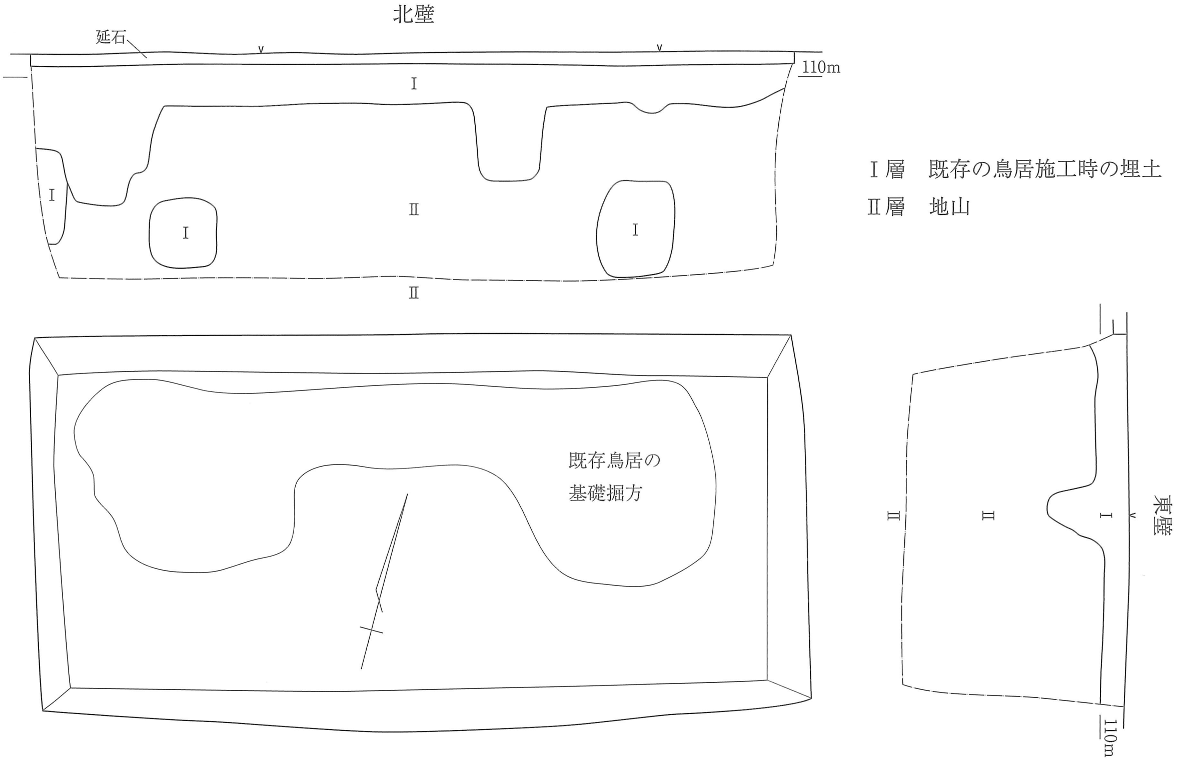
（１） 当陵の墳丘構造については以下の論考が詳しい。

福尾正彦「八角墳の墳丘構造―押坂内陵・山科陵・檜隈大内陵を中心に―」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』明日香村教育委員会文化財課、2013 年。

（２） 既存の木製鳥居は昭和 57 年（1982）に竣工したものである。



第 32 図　檜隈大内陵　調査箇所位置図（1/1,000、1/200）



第 33 図　檜隈大内陵　調査箇所平面図および断面図（1/50）

1　調査箇所全景（南から）

2　調査箇所東壁（西から）